「メルチング・ポット」の陥穽

—「鮫人」における浅草という空間—

一、はじめに

谷崎潤一郎にとって「浅草」という土地は重要なモチーフの一つだ。自身を「浅草党の一人」(『浅草公園』)、『中央公論』一九一八年九月)と規定し、初期には作品中でもたびたび問題化している。特に、「魔術師」(『新小説』一九一七年一月)のように価値観の転倒が起こる場として、また「秘密」(『中央公論』一九二一年一月)「鮫人」(『中央公論』一九二〇年一月、三、五月、八、十月)のよう何らかの挫折、乃至は現世への絶望を抱えて移り住んできた男が次の土地へ移動するまでの通過点として浅草を描いていることは興味深い。

浅草を「新時代の芸術や娯楽機関のメルチング・ポット」(同「浅草公園」と捉えていた谷崎は、それを集合と変容・逸脱のイメージで描いている。人々が浅草に集うことが起点となり、有象無象の

駒木 結

集合によって様々な変容が生まれる場所として大正期の浅草を表象したのである。また、浅草には「少年」のイメージを、時には「女性」のイメージを仮託するなど、性別越境的な存在として浅草を描写していることも谷崎の浅草描写の特徴の一つだ。^①浅草を流動的で日々時々刻々と変化する、特定の人種・階級・性別に固定されない街として描写することに重ねるように、その象徴として性別のみならず、人種、階級を含め属性を固定的に割り振られることを拒絶する存在を描いた。^②作中で浅草を通過することは、そうしたクイア性を通過することであり、浅草に魅せられる人物をクイアに接近させる展開が確認できる。^③

このような谷崎の浅草観は、先にも引用した「浅草公園」をはじめとする谷崎の浅草評をもとに、同時代的な浅草観に重ねて理解されてきた。例えば「浅草公園」と同時期に展開された浅草論では、浅草を「洋服の公園」「ステッキの公園」「束髪 of 公園」「長マントの公園」と表現し、「役人、商人、軍人、学生、番頭、小僧、職工、

異種異類の東京人が集う場所と評価している⁽⁴⁾。また、谷崎が「秘密」で書くように、「美しく賑やかな場所のすぐ裏面に魔窟がある」という特徴が、浅草らしさ⁽⁵⁾として理解されている。同時代人にとって、浅草は猥雑・混沌の地という認識だったことがわかるだろう。谷崎自身は、この特徴を先にも挙げたように「メルチング・ポット」という語で表現するが、こうした谷崎の浅草論も踏まえて吉見俊哉は、「あらゆる種類の階層を受け入れてしまうところに「浅草」という盛り場の重要な特徴がある」と論じた⁽⁶⁾。

この時、浅草は、眺められている⁽⁷⁾。同時代的にも「同公園が現代社会を最もよく縮写して居る」⁽⁸⁾、「浅草公園はいろんな意味に於て、眺めるに宜い「世相の縮図」と受け止められていたが、このことを宮内淳子は、浅草を舞台とした近代文学作品には、「外部から遊びに来る知的エリート」が浅草を眺めるといふ構図があると指摘している⁽⁹⁾。

しかし今一度注目したいのは、谷崎は浅草に「移り住む」者たちを描いているということである。それは、単に「眺める」あり方は異なっているはずだ。結論を先取りすれば、谷崎の浅草作品は、観察対象である「メルチング・ポット」としての先進的な浅草を描いた浅草評に留まるものではなく、「メルチング・ポット」としての浅草にも回収され得ない、自己の制御からこぼれてしまうノイズを表出し得るものなのである。

こうした観点で浅草を分析するにあたり、本稿では「鮫人」を中

心に取り上げたい。なぜなら、明治末の「秘密」に端を発して大正期には頻繁に浅草を舞台とした作品を書いてきた谷崎は、「鮫人」の中絶以後、大正末の大作「痴人の愛」でナオミを浅草生まれとするまで、浅草を取り上げなくなるからである。「鮫人」は、大正九年（一九二〇）一月号の『中央公論』から同年一〇月号まで、七回にわたって連載された後、大正一五年二月三日に改造社から単行本が発行された。大正から昭和への谷崎の転換期にあたる時期のテキストと言って良いだろう。そこで、大正期の谷崎作品について浅草という視点から検討するために、「鮫人」が最も適したテキストであると考えた。そして、谷崎が浅草を論じる際に用いたキーワードである「メルチング・ポット」が最もよく描かれたと思われる「鮫人」は、同時に「メルチング・ポット」の陥穽も抱え込んでしまっていることを本稿で明らかにしたい。

二、「鮫人」の浅草と「メルチング・ポット」

前節でも触れた通り、一九一〇年代の浅草は、その雑多さの特徴とし、「新時代の芸術や娯楽機関のメルチング・ポット」と捉えられていた。グレゴリー・ケズナジャットは、「魔術師」に描かれる浅草を中心に谷崎の「メルチング・ポット」を分析し、「あらゆる差異は崩壊し、一点化しようとする」ものと定義づけ⁽¹⁰⁾た。その特徴は、「混濁の裏に清新を孕み、魔類の底から活気を吹き、乱雑の中

に統一を作り、悲哀の奥に歓楽を醸し、不思議にも常に若々しく溶々たる大河のやうに押し進んで行く」と描写される「鮫人」の浅草においても同様である。すなわち、異種異類の人たちが溶け合い融合する空間とみなされているのだ。その浅草に、男が移り住むことから物語が始まるのが「鮫人」だ。移り住んだ男がどのように「溶けあい融合する」のか。

谷崎が、男が浅草を「眺める」だけでなく、浅草に「移り住む」という視点を持っていることは既に述べた。これは、浅草ものの特出点である。「秘密」においてはじめて用いられた設定で、「鮫人」にも引き継がれる大きな特徴の一つと言って良い。それでは、その浅草への移動はどのような背景を持っていただろうか。まずは「秘密」の冒頭を確認しよう。

其の頃私は或る気紛れな考から、今迄自分の身のまはりを裏んで居た賑やかな雰囲気を遠ざかつて、いろいろの關係で交際を続けて居た男や女の圈内から、ひそかに逃げ出ようと思ひ、(中略)浅草の松葉町辺に真言宗の寺のあるのを見附けて、やうく其処の庫裡の一と間を借り受けることになつた。

「秘密」の「私」は、「派手な贅沢なさうして平凡な東京」を忌避し、隠遁生活を送るために適した場所を探し求め、浅草に転居した。六区や吉原と「廃れたやうな区域」が同居している様子を「非常に気に入つて」とされる。ここで特徴的に感じられるのは、東京を忌避して転居した先が、東京に含まれる場所であるというねじれ

である。ただしこれは意識的なねじれであり、「渋谷だの大久保だ」と云ふ郊外へ隠遁するよりも、却つて市内の何処か人の心附かない、不思議なさびれた所がある⁽¹⁾はずだという思想に支えられていることがわかる。「鮫人」でも、隠遁の経緯から場所を浅草に定める時の思考にいたるまで、ほぼ「秘密」の「私」を踏襲していることは明らかだ。「鮫人」の服部はやはり、「彼は都会人であるから、東京の醜悪が厭になつても田舎へ引つ込む気にはなれ」ず、「其の醜悪が最も露骨に現れて居る方面——公園の近所に巢を造つた」とされる。

竹村民郎によれば、二十世紀初頭の東京は、都市の膨張に伴う諸問題の解決策として、郊外開発に注目が集まっていた時期である⁽²⁾。欧米の田園都市運動の影響を受けた『田園都市』(内務省地方局有志編、一九〇七)や田園趣味を鼓吹するためのパンフレット『郊外生活』(阪神電鉄、一九一四創刊)等も相次いで刊行され、一九一八年には、エベネザー・ハワードの田園都市論に基づき、日本型田園都市の開発を目指して「田園都市株式会社」が設立された。このような、都市から郊外へという移動が一般的だった風潮の中で、谷崎の描く「都会を避けて浅草へ」という移動は極めて異質に受け止められた可能性が高い。しかし、「都会を避けて郊外へ」という移動では、「都市の膨張」すなわち、「東京の醜悪」の文脈に回収されてしまうことになるため、「醜悪」を突き詰めた先で「美」へ反転する可能性のある土地として、あえて浅草を選ぶという論理だと解

積することができる。

この異質な移動の原動力になっているのは、紛れもなく「東京への嫌悪」だ。その端緒となっている服部の出自について確認してきた。

もとは彼にも立派な親があり家庭があつて、つい四五年前までは可なり裕福に暮らして居た。(中略)で、彼が何故に彼の立派な親と家庭とを一時に失ふやうなハメになつたかと云ふ理由は、話し出せば長くなるから後の機会に譲るとして、(後略)

服部の出自は、明確には描かれぬが、服部は比較的「裕福」な家に育つたことはわかる。そして、その状況は、明かされない理由によつて崩壊した。物語内の時間が一九一八年春頃とされるため、服部が裕福に暮らしていたのは一九一四年前後、すなわち第一次世界大戦の始まる前頃であることが推測できる。先述した「膨張する東京」の一部を、服部家も担っていたのではないだろうか。その後、の経緯は明かされない以上、追究の余地はないが、浅草に移動する服部には、かつて自らもその一部を担っていた東京の発展に対する嫌悪があるということには、一見の価値がある。

それでは、続いてその「東京への嫌悪」によつて移動した浅草で、どのような生活を送っていたかについて確認する。

作者は此の章の初めに、服部が成るべく無駄な費用と労力とを切り縮めて暮らして居ることを物語つたが、実を云ふと、彼の節約は文字通りの意味ではないので、その節約から剩し得たも

のを悉皆食慾の方へ浪費するのだつた。彼は出来るだけ生活を簡素にしてさうして出来るだけ多くを食つた。

服部の浅草での生活は、「食」を中心に語られる。移住後の変化のポイントは、「質を問わないで量をむさぼる」ところにある。その「量をむさぼる」ために全てを切り詰めている服部の生活は、同時代に流行していた「生活改善運動」¹³の思想とは逆行するものだと見える。この「生活改善運動」は都会の新中間層を中心に啓蒙されたものであり、服部が嫌う「東京の醜悪」のうちの一つではないかと考えられる。すなわち、服部は浅草への転居の理由からその生活にいたるまで、「醜悪な東京」へ対抗しているのだと読むことができる。

また、ここで服部は、粗悪なものが入り乱れるとされる浅草公園に自分の身体を擬態させているように読み取れる。服部が「東京の醜悪」のアジールと考える浅草は、雑多で、「互に入り乱れて交錯し融和し合っている」と特徴づけられる。その浅草の娯楽を担う歌劇団の梧桐寛治の楽屋は、「まことにそれは公園に住む俳優たちの楽屋に適していると云はねばならない」、すなわち浅草の象徴のよう語られている。この「宙ぶらりん」な空間に、服部の旧友である山の手育ちの南は馴染めないことがたびたび言及されるが、服部としては、ここが「僕の世界」であり、「僕の憧れているものが彼処にある」と考えているため、この空間に馴染むべく、生活する身体を浅草らしく表現しようとした。身体を浅草化させることが、服

部にとって「醜悪な東京」への対抗なのだ。

この浅草に移り住んだことによる生活習慣及び身体の変化は、特に前半では克明に記される。服部の身体の変化は、浅草で生活するものの一員になったことを示し、それが服部にとっての「溶けあい融合する」ことであった。

そこでの服部の身体、及びその変化がどのように描かれているのかについては、次節で分析する。

三、エトランゼとしての服部

服部は吃音持ちであることが、物語の前半でたびたび取り上げられる。例えば次の場面では、実際の口調までが書き起こされている。

少し吃りの有る口調で気むづかしさうに尋ねたのが喧嘩のもただつたのである。(中略) 服部はますます急き込んで吃りながらまたそれへ喰つてか、つた。「しかしだね、君は今何と云つた？ 火、火、火の附かないマチはないと云つたぢやないか。

(中略) 此れからこ、こ、このマチをくれる時は、此れは景物でございますから火、火は付きません。(後略)」

興奮状態で吃音が出るという描写が繰り返され、精神状態の悪さの発露として吃音が生じていることがわかる。事実、一九一〇年代には吃音研究が盛んであり、「吃りが精神の作用に依ることは種々の場合に認めらる、」⁽¹⁴⁾ことが広く知られていた。服部の症状もその

一般的なものだが、一方で酒を飲むと吃音が出なくなることが服部の特徴とされている。また、この酒を飲むという行動は浅草で身についたものとしても描かれており、浅草に馴染んでいる間において吃音は後景化するが、それが忘れられると前景化してくるという構図になっている。

そこまで語つて来た時、服部は肩と腕とを激しく顫へわな、かし、蒼白い顔を一層蒼白くしながら水しぶくれの頬ぺたへピクピクと痙攣を作り、急に体に異状が起つた如くぼうつと失心して前のめりにぐらぐらと倒されさうな風だつたが、直ぐ又眼をぱつちり開いて両手で頤を抑へ、ガクガクと歯の根も合はずに居る其の頤の間から、意外にも——ずどんと一度に天から下へ落つこつたやうな言葉を吐いた。(中略)

可哀さうに、彼はすっかり酒が醒め切つたところを今の話でひどく興奮させられたのである。

酔いが醒めて興奮すると出てくる痙攣、蒼白の表情、こわばつた眼つき等は、服部の吃音の隣接的な身体症状だ。中でも「眼つき」に関しては、服部が外部の人間として浅草の人間を評するかのような場面で執拗に描写される。例えば南が上海で見た林真珠(リンチェンチュウ)の話⁽¹⁵⁾を服部にする場面で、服部は、自身が林真珠(はやしんじゅ)のことを気に入っている理由を語りながら「奇妙な眼瞬きをする」ことが描写される。そもそも、南が真珠の存在に注目することになったきっかけが、服部が舞台上の真珠を見つめるそ

の眼差しであった。その場面を次に引用する。

舞台を覗き込んで居る眼の方は顔よりも一層悲し気に、狂人のやうにも、酔いどれのやうにも、或は白痴のやうにも見える奇妙な沈痛な光が燃えて居て、その光の底からは、例の襟頸をふるはせるたびに涙を湛へたやうな潤ほひが輝き出すのである。さうして顔が寂しさうにひしやげればひしやげるほど、眼がよいようつとりとした光と潤ほひとを加へて行く。(中略) 彼は此の一年間の服部を知らなかつたので、服部の「痴呆じみた瞳の中にも時々閃めくことのある深い悲しみを帯びた清しい耀き」に、今初めて接したのである。

(前略) 服部のその眼つきの裏にこそ、彼の憧れつ、ある永遠なものが影を宿して居るやうに思へたから。

すなわち、服部の吃音及びその隣接的な症状、そして眼つきは、服部のエトランゼ性を象徴すると同時に、やはり浅草の外部の人間として「まなざす」欲求から逃れられていないことを表すのである。このことは、「鮫人」が中絶したことをも象徴している。「鮫人」は、不思議な行動をとる真珠しんじゆのことを、まさしく「外部の人間」として見張る」役割を服部が命じられたところで、その続きが描かれることなく未完となつてしまつた。浅草に移り住んで溶け込むはずが、「溶けきらない」欲求を抽出されてしまつたことに対し、その続きを見出せなかつたことが「鮫人」を中絶に追い込んだのだ。⁽¹⁵⁾

ここで一つ、次の問いについて解決しなければならぬ。浅草を

「まなざす」欲求から逃れられない服部は、典型的な浅草を眺める知的エリートエリートの役割を担っている南、及び同時代の他作品に現れる登場人物達と同じことになるだろうか、という問いだ。例えば、服部の前身とみなした「秘密」の「私」には、紛れもなく浅草を眺める知的エリートとしてのふるまいを認めることができる。

松葉町のお寺の近傍は、其のうちでも一番奇妙な町であつた。六区と吉原を鼻先に控えてちよいと横丁を一つ曲がつた所に、淋しい、廃れたやうな区域を作つてゐるのが非常に私の気に入つて了つた。今迄自分の無二の親友であつた「派出な贅沢なさうして平凡な東京」と云ふ奴を置いてき堀にして、静かに其の騷擾を傍観しながら、こつそり身を隠して居られるのが、愉快でならなかつた。

「私」は、たとえ奇妙な女装をして歩いていても「交番の巡查も、行人人も、一向気が附かないやう」な浅草で、「犯罪を行はずに、犯罪に附随して居る美しいロマンチックの匂ひだけを、十分に嗅いで見たかつたのである」と述べる。ここには、浅草を奇怪で犯罪臭のする街と見なし、その雰囲気だけを味わいたいという視線を読み取ることができる。そして、浅草の「秘密」を担っていた女の正体が暴かれた途端に、街への興味も失うのである。

一方の服部は、『人間』の中にある悪い事や浅ましい事が好きで「誘惑され、ば直ぐに悪魔に魂を売る」ことを「犯した罪を謝りでもするやうな口調」で語る。その墮落は浅草へ来て以降一層強

まっていると述べ、「怠けるよりもつと悪いことを食うに困ればずるかも知れない」という自覚を持っている。これは、「秘密」の「私」がいわばファッションとして犯罪の匂いを纏いたいとする姿勢とは明らかに異なる。

服部からは、ファッションとして浅草を消費する意欲は感じられない。そうであるにもかかわらず、浅草から「エトランゼ」の扱いを受けてしまう服部は、文字通りどこにも行き場がない。元はそれなりに裕福な暮らしをしていた階級の生まれである服部は、いくら落ちぶれたとしても、特権階級的しぐさを持っている限り浅草には受け入れてもらえない。浅草の「メルチング・ポット」は何もかも分け隔てなく受け入れてくれるものではなく、内側に入ることを望んだとしても生まれた「家」の階級により線引きされ拒絶されるものであることが服部によって浮き彫りにされたのである。

浅草は、どんな人種・階級も呑み込んでくれる享樂の都市ではない。最初から内側に入り込む気のない南や「秘密」の「私」が受け入れられないのはもちろん、服部ですら内なる階級意識を暴かれてしまうのであり、むしろそうした階級意識を炙り出すシステムとして機能しているのではないか。ここには、「階級」を逃れられない運命のようなものとして捉えるかのような、谷崎の持つ「階級」というものへ向ける視線の鋭敏さまでも読み取ることができるだろう。

四、「中流」という階級

服部が浅草の「メルチング・ポット」により抽出されてしまった「まなざす」欲求は、特権階級しぐさであることは明白だ。そこから逃れたかった服部の意識について、本節では分析を行う。

「鮫人」の物語内時間は一九一八年四月頃に設定されている。その頃の現実の日本社会では、第一次世界大戦を背景とした物価の上昇などによって市井の人々の生活が圧迫され、貧困問題がクローズアップされていた。例えば、一九一六年には河上肇が『大阪朝日新聞』で「貧乏物語」を連載した⁽¹⁶⁾。明治末から大正中期にかけては、俸給生活者が増大し、所謂サラリーマンが一つの社会階層として成立したと言われる⁽¹⁷⁾。竹内洋によれば、「サラリーマン」という言葉がはじめて現れるのは大正初期のことであり、「サラリーマン」は、日本における中産階級を指す社会的表徴であった⁽¹⁸⁾。そしてこの新中間層と言われる人々の貧困の問題も、やはり大正中期から盛んに議論されていたのである。「第一世界大戦中の好景気は、サラリーマン層の生活を一時的にうるおし、「成金熱」をかきたてた⁽¹⁹⁾」が、「戦争末期から戦後へかけて、生活必需品の価格がいちじるしく高騰し、大多数のサラリーマンの生活は急激に悪化した」からだ⁽²⁰⁾。先に言及した新中間層に対する生活啓蒙の言説も、この議論の延長線上にある⁽²⁰⁾。博文館から刊行された雑誌『生活』（一九一三年七月創刊）誌

上において、この問題が盛んに論じられていた。初期の『生活』に掲載された読者投稿からも、社会の中堅であるはずの「中流」、すなわち新中間層が、生活難に陥っている状況を読み取ることができ⁽²¹⁾る。

最近の生活難は下層——労働者階級ばかりに止まらず、犇々と中層階級までも襲ってきた。(中略) 上と下とに抑付けられて、帯に短し襷にや流して一番苦痛を感じてニツチもサツチも行かないのは、此の国家として最大緊要な中産階級である。

また、こういった生活難に苦しむ人々のことを、与謝野晶子は「謂はゆる中流の名を以て呼ばれる貧民階級」と名付け、次のように述べた。⁽²²⁾

生きて行くのに欠くことの出来ない第一の必要品の食料の値が今日のやうに法外に暴騰すると、社会はそれに堪へ得る経済力の有る者と無い者、即ち有産階級と無産階級の二つには、はつきりと大別されて仕舞ひます、吾々無産階級の者は職業によつて多少の相違はあつても痛ましい飢餓の事実を目前に接触して居るのでから、(中略) かう云う現状にある者が謂はゆる中流の名を以て呼ばれる貧民階級に多いと思ひます。米其他の食料の暴騰が今日の調子で尚二三箇月も続いたら、社会の優良分子である中流の貧民がその体質と精神とを腐敗させずには置かず、最も悲しむ国民の墮落は是から始まるだらうと思ひます。こうした、新中間層の貧困問題について、谷崎は「鮫人」より前

に既に「小さな王国」(『中外』一九一八年八月、原題「ちひさな王国」)において、貝島昌吉という人物を通して描いている。貝島は、典型的な新中間層であり、教師という身分であるがゆえに体面を気にするあまり貧困から抜け出せずに発狂した人物として描かれた。⁽²³⁾

この問題を、「鮫人」でも取り上げるにあたり、下層階級と中流階級のあわいに服部を位置づけたのである。

二節でも述べた通り、浅草に移住する服部の動機は、「東京への嫌悪」であり、それはつまるところ、支配的な階級に対する抵抗なのだ⁽²⁴⁾と理解できる。支配的な階級への抵抗を描くために、落ちぶれた中流階級で、そうであるかと言って下層階級にも受け入れてもらえない立場を描くことにどんな意味があるのか。

谷崎が服部を通して描いたのは、端的に言えば、階層間の移動はそれがたとえ転落する方であつたとしても容易ではないということだ。服部の場合、いくら「悪い事や浅ましい事が好き」で「悪魔に魂を売る」意識を持ったと語ったとしても、身体に染み付いた気性の点で、生まれ持った階層の印を消すことはできなかった。そうだとすれば、服部は「謂はゆる中流の名を以て呼ばれる貧民階級」という立場に陥ってしまった時、貝島のように体面を保とうとして生活を維持できないばかりでなく、体面を保つことを放棄したとしても望んだ通りに生きられないという隘路に立たされている。

この隘路を解決できなかったところに、「鮫人」の中絶の理由は求められるだろう。二節でも言及した通り、「まなざす」側として

の立場を浮き彫りにされたところで、「鮫人」は中絶している。本来「あらゆる人種や階級」を受け入れる場所だったはずの浅草という「メルチング・ポット」に「溶けきらない」部分があると示すことは、浅草を描く物語においてきわめて斬新であったが、同時に物語の破綻を招くものでもあった。

やや飛躍してこの物語を捉えたとすれば、「鮫人」は、出自に関係なく「学歴」によって身を立てる新中間層という拠り所の不確かな地位でさえも、「家」の中で固定的に引き継がれていくことの奇妙さまでも孕んだ作品だと言えよう。出自と階層の問題は、谷崎作品を通して共通項を見出すことのできるテーマの一つだ。この問題が、大正期の谷崎のもう一つの大きな関心であった「浅草」を舞台に展開されているところが、「鮫人」という作品の最も興味深い点である。

五、「鮫人」の位置づけ

「鮫人」はこれまで、「浅草」という混沌を描ききれなかった（ために中絶した）と見なされてきた。浅草を描ききれないというのは、「鮫人」に限らず浅草を舞台とした作品を総合して下される評価であり、例えば千葉俊二は次のように述べる。⁽²⁴⁾

一九一〇年代の谷崎は、醜悪の中に美を見出すボードレールへの傾倒から浅草を舞台とした作品を多数執筆したが、いずれも

十分な成功を収めたとは言えず、時々刻々と姿を変える浅草を描くことの難しさを体現している。

谷崎が一九一〇年代に執筆した浅草を舞台とする作品で、同時に評価を受けたものはほとんどなく、「鮫人」が中絶していることをふまえても「成功を収めたとは言えない」のは事実だ。「秘密」にしても、期待を背負った商業誌デビュー作であったが、同時代の評価としてはどこか物足りないというものがほとんどであった。⁽²⁵⁾

しかし、成功したかどうかという評価に加え、浅草を描くことが何が難しく、何を描けなかったのかを分析することも重要だ。「鮫人」に書き込まれた浅草公園への評価が描かれた、次の一節を参考にしたい。

今の日本社会、今の東京市全体は一個の不良老年ではないか。此等の不良老年の中で浅草公園だけが不良少年なのである。不良でも少年には愛嬌があり活気があり進歩がある。

浅草公園の特長として、「盛んに流転するが故に」洗練されていく側面がよく言及されるが、この「少年」という記述を見れば、その進歩の速さばかりではなく未成熟性にも魅力を見出していると考えられる。そうであるとするれば、時々刻々と姿を変える浅草を、そのまま未完成なものとして、すなわち混沌を混沌のままに描いたのだと捉えることができる。そしてその浅草公園の混沌の中に混ざりきれないものを服部の中に見出したことが、「鮫人」における評価すべき点だと言えよう。この特徴は、同時代における「中流」とい

う存在の危うさも表現することになった。

谷崎は、中流と言われる新中間層の主人公を、「鮫人」の前後に二作描いている。一つが先にも言及した「小さな王国」、もう一つが大正期の集大成的な代表作と言われる「痴人の愛」(『大阪朝日新聞』一九二四年三月二十日〜六月十四日、『女性』一九二四年十一月〜一九二五年七月)だ。拙稿では、「小さな王国」の貝島と「痴人の愛」の譲治を似た存在として論じたことがあるが、「鮫人」の服部は、この間に位置し、異なる角度から新中間層の問題を照らし出した登場人物だと言える。⁽²⁶⁾大正期の谷崎にとって、都市を描くことと、「中流」という存在への興味は繋がっていたと考えられるだろう。

六、おわりに

大正期の谷崎はスランプだったと言われてきたが、近年ではテーマ設定や実験的な内容が改めて評価されてきている。「鮫人」も、浅草評としてだけではない側面が近年見出され評価されつつある作品だ。そのなかでも本稿は、都市への嫌悪という側面から、「中流」という階級へ向けるまなざしに注目し、「痴人の愛」へと繋がる道筋を見出した。「鮫人」が谷崎作品のなかで持つ意義を捉え直したことは、大正期の谷崎像の新たな側面に光を当てることに繋がるだろう。

注

- (1) 浅草公園のことを一方では「不良少年」と形容し、もう一方では「夜の彼女」が更に物凄い妖婦⁽¹⁾であるとする。
- (2) 竹内瑞穂「変態の流動」―谷崎潤一郎「鮫人」の逸脱者たち―(『変態』という文化) ひつじ書房、二〇一四年三月) では、林真珠が「男から女へと変態したように描かれ」ることが指摘され、浅草を象徴する存在である林真珠が、ジェンダーやナシヨナリテイという属性を固定的に割り振られることを拒絶する点が論じられている。
- (3) 浅草公園は、「足を踏み入れるや否や出鱈目になりとんちんかんになる」場所と説明される。また、浅草を舞台とした作品でも同様の描き方が散見されるが、岩川ありさ「クイア作家としての谷崎潤一郎」(五味湖典嗣・日高佳紀編『谷崎潤一郎讀本』翰林書房、二〇一六年二月) は、「魔術師」における浅草を象徴する存在である。魔術師⁽²⁾が、「規範的な身体を中心とするストレートな世界のあり方自体を問う」ものとして、魔術小屋に近づく者たちの世界を反転させてみせたことを論じた。「秘密」の「私」が、「着脱可能な衣装のようにジェンダーを取り換える」と指摘した点も、浅草におけるクイア性への接近と捉えられる。
- (4) 無署名「でもくらしー活動写真と浅草公園」(『新社會』一九一八年七月)
- (5) 富菊雄「私の観た浅草公園」(『活動寫真眞雜誌』一九一八年七月)
- (6) 吉見俊哉「都市のドラマトゥルギー 東京・盛り場の社会史」(河出書房新社、二〇〇八年一〇月) 二二七頁。
- (7) 前掲「私の観た浅草公園」
- (8) 松崎天民「過去の千日前とこれからの浅草」(『中央公論』一九二〇年七月)
- (9) 宮内淳子「遊び、働き、住むところ 川端康成・佐多稲子たち、それぞれの浅草」(『ビジュアル資料でたどる文豪たちの浅草』勉誠出版、二〇二〇年四月)
- (10) グレゴリー・ケズナジャット「メルティング・ポット」のあり方⁽¹⁾「魔

- 術師」論（博士学位請求論文『谷崎潤一郎の（メルチング・ポット）』、大正・昭和初期の作品における越境的美学、二〇一七年）、同志社大学、京都
- (11) 拙稿「谷崎潤一郎『魔術師』論—大正デモクラシーから逸脱する「群衆」による現実更新の可能性—」（『国文学研究』二〇一八年六月）では、明治末から大正にかけての谷崎の問題意識として、知っているはずの場所の未知性に着目していたことを指摘した。
- (12) 「文化環境としての郊外の成立」（『大正文化 帝国のユートピア—世界史の転換期と大衆消費社会の形成』三元社、二〇一〇年八月）
- (13) 大正期から昭和初期にかけて、衣食住の消費生活や、社会習慣全般の合理的改善を目指して展開された運動。様々なメディアで取り上げられ、主に新中間層に向けて啓蒙された。生活改善運動と新中間層の関わりについては、久井英輔『近代日本の生活改善運動と（中流）の変容—社会教育の対象／主体への認識をめぐる歴史的考察』（学文社、二〇一九年一月）に詳しい。
- (14) 一九〇三年に吃音矯正所「楽石社」ができ、一九一〇年代にかけて吃音に関する書籍も多数出版された。例えば、鴨田修治『どもり矯正法』（日本薬学協会、一九一一年二月）、緒方正雄『実験吃音矯正』（田島書店、一九一八年二月）など。
- (15) 「鮫人」の中絶について先行研究では、前掲資料（注②）の竹内が、流動的な都市の象徴として揺らぎを持つ存在である真珠の特徴を鋭利に描くほど、「鮫人」は完結することから遠ざからざるを得ないテキストとなったことを指摘した。
- (16) 第一次世界大戦をきっかけに「貧困」が社会問題化したことを受けて書かれた。「鮫人」の背景に置かれている服部の「東京への嫌悪」も、第一世界大戦による社会の変動によるものであり、同じ文脈を共有している。
- (17) 松成義衛・田沼肇・泉谷甫・野田正徳、「日本のサラリーマン」（青木書店、一九五七年）一六頁。
- (18) 竹内洋『日本文化の社会学』（岩波書店、一九九六年八月）一二七頁。
- (19) 田沼肇「中間階級」論の展開（『現代の中間階級』大月書店、一九五八年一月）
- (20) 小路田泰直「帝国主義的都市の成立と生活難問題」（『部落問題研究』九八号、一九八九年四月）
- (21) 「余裕ある生活法」『生活第2巻2号』（一九一四年二月）
- (22) 「中流の無産階級 恐怖と苦痛の現状 与謝野晶子女史談」（『東京朝日新聞』一九一八年八月一六日）
- (23) 日高佳紀「改造時代の学級王国—谷崎潤一郎『小さな王国』論—」（『日本近代文学』一九九八年一〇月）では、教師の貧困問題を取り上げ、貝島が貧困に陥っていく過程と関連付けた。
- (24) 「解説 坩堝としての浅草」（千葉俊二編『潤一郎ラビリンス浅草小説集』（中央公論新社、一九九九年一月）
- (25) 例えば、春鈴「霜月の文芸」（『東京日日新聞』一九一一年一月一〇日）においては「氏が血だらけな歓楽から、力弱き快感に立ち戻ったということとは、此一篇の全体に亘つて甚だ物足らなさを感じさせるものであり、「以前の氏の数篇何れよりも『秘密』の権力は遙かに下つてゐる、あつけないものであつて、『秘密』は氏の作中の佳作では決してない」とされ、白石実三「雑誌月評」（『文章世界』一九一一年二月）では「谷崎潤一郎氏の小説『秘密』は例によつて特色のある鮮明な筆づかひをしてゐるが、内容は甚だツマラナイ」、「言はゞ、体のいゝ洒落」と評されている。
- (26) 「ナオミの悲劇—「痴人の愛」における謔治の理想と大正期の女性教育—」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』二〇二〇年三月）

※本論文における谷崎潤一郎の作品（『秘密』『鮫人』）の引用は、すべて『谷崎潤一郎全集』（中央公論新社、二〇一五年五月—二〇一七年六月）に基づき、旧漢字は新漢字に改めたうえで、ルビは省略した。